

ネパール医療スタディーツアーに参加して

早稲田大学先進理工学部生命医科学科 2年 K. H

理工学部に所属している私は、普段は基礎医学を中心とした勉強をしているため臨床医学に触れる機会は今まで全くありませんでした。そこで、異国での医療の現状を知るとともに、日本で臨床医学を学ぶ他の参加者からの刺激を受ける良い機会と思い、この医療スタディーツアーに参加させていただきました。

到着翌日は看護学校訪問およびカトマンズモデル病院での学生とのディスカッションを行いました。ネパールでは思ったよりも予防接種などの制度が充実していることや医学教育の門が日本と比べて非常に狭いこと、現地学生はみなとても英語に堪能であること(ネパールでは小学校からほとんど英語で授業が行われるそうです)など、活動初日から驚きの連続にすっかり面喰らってしまいました。

カトマンズモデル病院では3日間実習を行い、十分とはいえない医療器具をなるべく有効に活用するために様々な工夫がなされていることや、日本のように「ただ診察するだけではなく患者さんの精神状態にも気を配る」という姿勢が重視されていることなど多くのことを学びました。また、多くのものを得た一方で問題点を散見することも多々あり、なかでも最も印象に残ったのは、医療器具や薬品の管理が全体的にずさんであることでした。血液検査のサンプルが空気に接触したまま長時間放置されていたり、劇薬のビンと紅茶の箱が同じ棚に置かれていたり、使用済みの注射器やガーゼが床に放置されているなど、通常では考えられないような光景に非常にショックを受けました。これらは一歩間違えば異物混入や感染症を引き起こすおそれがあるため非常に危険であり、ただちに改善すべき問題点であると感じました。器具や薬品の管理体制を整えることにより、同じ設備のもとでも検査結果の正確化や事故の減少を実現することができ、よりよいサービスを提供することができるのではないかと思います。

活動5日目は体調不良でダウンしてしまったため JICA のオフィスやビル病院は残念ながら訪問できなかったのですが、最終日に訪れたキルティブル病院や Gender Based Violence Center でも多くのことを学ぶことができました。出産時の補助金制度や政府の援助による経口避妊薬・避妊器具の無料配布など、日本と同じような制度あるいは日本よりも充実した(と私は感じました)制度があることを知り、また施設の方の「一人でも多くの人により豊かな生活を送ってほしい」という思いを強く感じ、見習うべき点がたくさんあると思いました。

また、病院や施設だけではなく様々な観光地にも連れて行っていただきましたが、結婚式で生け贄や御馳走にするためのヤギが大勢の目の前で殺され、落とした頭や取り出した内臓が当たり前のように人目にさらされているようすや、パシュパティナートの火葬場でご遺体が運ばれてきてから灰を完全に処理するまでの様子がありのまま街に溶け込んでいるようすを目にし、日本とは全く異なった死生観のもとに人々が生活していることを感じる機会が多くありました。他にも、木彫りの窓枠が印象的なバクタプル、敬虔な仏教徒の方が多く訪れるボダナートなどを

訪れ、美しい街並みや子供たちの笑顔に心を奪われました。

このツアーを通して学んだことは他にも書ききれないほどありますが、どれも普段は体験しえないとても貴重な経験であったと思います。時間の経過があっという間で、現地での生活に慣れてやっと余裕が出てきた頃に最終日を迎えてしまったことが非常に心残りだったのですが、この8泊9日間で学んだことをもとに、基礎医学の領域に関わる者として自分にできることは何なのかをもう一度よく考えて将来に生かしていきたいです。短い間でしたが、同行して下さった生協のお二人や参加者の方々、お世話になった現地の方々から心から感謝しています。ありがとうございました。